

【研究論文】

旅情

— 『伊勢物語』 「東下り」の教材化・導論—

西 一夫・澤田 浩文・戸塚 拓也

はじめに—「旅」への志向—

題目とした「旅情」は、日本の古典作品では、早く『万葉集』の題詞に次のように見える。

到筑前国志麻郡之韓亭^一、船泊経^三三日^一。於^レ時夜
月之光皎々流照。忽对^三此華^一、旅情悽愴。各陳^三心
緒^一、聊以裁歌六首（15・三六六八）

奈良を出発した遣新羅使人たちの船旅の途上で「韓亭^{からのとまり}」にて三日間停泊している夜に、月光が美しく照り映える景色が眼前に出現した。この光景を見て旅にある心情に胸が塞がった。その心情を歌にしたのだという。この題詞に括られる六首には、「日長くしあれば恋ひにけるか

も」（三六六八・大使）「闇にも妹が恋ひつつあるらむ」（三六六九・大判官）「家なる妹に逢ひて来ましを」（三七七一）などから明らかのように、家郷やそこで帰りを待つ「妹」に対する慕情が直截的に詠まれている。言うまでもなく古代の旅は現在とは異なる印象で捉えられていた。

わが家は行か人も草枕旅を苦しと告げ遣らまくも
草枕旅の憂へを慰もる事もありやと……
（20・四四〇六、大伴部節麻呂、防人歌）

草枕旅の悲しくあるなへに妹を相見て後恋ひむかも
（11・三一四一、羈旅発思）

これら『万葉集』の歌に見られるように辛い行為であった。当時の旅は、防人のように九州の防御のために東国の男子が徴集されたり、役職を受け（虫麻呂歌集では、他にも「検税使大伴卿登筑波山時歌一首」（9・一七五三、五四）があることから推して官命による旅に同伴していたと思われる）たりすることから、大部分が公的な性格を帯びていた（四四〇六、一七五七）ので、自らの意志によって旅に出ることは、ほぼなかったと推察され

る。このように古代の旅を位置付けると、平安時代においても、その傾向は大きく変化していないと見通すことができるのではないか。

音羽山のほとりにて、人を別るるとて詠める

貫之

音羽山木高く鳴きて時ほとり鳥君が別れを惜しむべらなり

(古今集・離別・三八四)

源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりける時に、山崎にて別れを惜しみ蹴る所にて詠める

白女

命だに心になふものなれば何か別れの悲しからまし

(同・三八七)

「旅」はさまざまな変容を遂げながら官命とは限らず多様性を見せるようになりながらも、古代の傾向から大きく逸脱するものではないと思われる。

かたや散文に目を向けるならば、主に実録を基盤とした『土佐日記』『更級日記』などは、官命を終えての上洛の旅である。前者は任地で失った女兒への思いと帰京への心情とが複雑に絡まり合いながらの船旅が描かれ

る。後者では作者が等身大の薬師仏に対して「京にとく上げたまひて」と速やかな帰京の実現を祈念している。いずれの作品も上洛はある程度望まれるべき行為であったと把握できるだろう。

また都から地方に移動する下向の旅としては、『源氏物語』の須磨退去と『伊勢物語』の「東下り」とが、教科書教材として知られている。須磨退去では主人公の光源氏の置かれた状況を打開する機会を得て物語の新たな展開を拓くための動機も組み込まれているなど、物語全体の構想にも関わる要素を内包している。一方「東下り」では、男主人公が東国へ下向する理由は「身を要えなきもの」に思ひなして、京にはあらず、あづまの方に住むべき国求め」と抽象的に述べられるにとどまる。「要なし」は「必要でないもの」(新編全集)「値打ちのないもの」(古典集成)などと解され、本来的にはそうでないものを、あえてそのような内容と理解しようとする姿勢が感受される(。章段冒頭部分の旅立ちでは悲愴感ただよう中で東国へと向かいながらも、最初の舞台として位置付けられている三河の「八つ橋」では「折句」を試みて「乾飯の上」に涙落としてほとびにけり」と遊戯性が明らかに認められるなど、下向する一行には心のゆとりのようなものまでが感じられるようである。「八つ橋」での詠歌に限らず、

つづく駿河国の「宇津の山」「富士山」、さらに最終場面である「すみだ河」まで「八つ橋」での印象が継続的に漂うのではないか。

一 「東下り」の文章構成

本章段については、すでに附属語と段落構成とに着目して全体の概略を示した⁽²⁾。また和歌の表現技法に着目した分析も示している⁽³⁾。これらの論考で指摘した構成と各段落の内容、さらには章段全体の物語としての意義と詠作されている和歌表現の特徴について、中等教育における教材化研究の視点から分析を行う。これによって、本教材によって習得すべき学習指導要領で示されている資質・能力並びに思考力・判断力・表現力、さらには「我が国の言語文化」についての提案をおこない、授業改善の一助とするものである。

現行の教科書を調査した結果、「東下り」は基本的に必修教科目「国語総合」に採録されている教材である。また多くの教科書が説話単元につづく物語単元を設定しており、この単元に採録されている傾向から推せば、本格的な古文学学習において比較的早い時期の学習教材と判断言えるだろう⁽⁴⁾。よって文語文法の習得も十分とは言え

ず、さまざまな制約の中で学習がおこなわれていると推測できる。

本章段の段落構成については、基本的に西(二〇一九)に示した構成によって検討を進めることとする。「東下り」の導入である起筆の段落は、次のような内容である。

昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人しで行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行きけり。

先に概観した教科書での掲載状況を勘案すれば、基本的な文法事項の理解はある程度可能であり、例えば過去の助動詞「けり」等は理解の届く範囲であると言える。

このような推測が妥当であるならば、冒頭の旅立ち部分は、すべて「けり」を文末に有する表現で統一されていることが了解される。これは間接的な過去の事象を語る形式で物語の発端が示されていることを意味している。

しかも四文で述べられている内容は、順を追って示せば主人公の提示(一文)、主人公が京の都を離れて東国へと住む場所を求めてゆくこと(二文)、その東国行きには少人数の同伴者がいるにもかかわらず(三文)、いず

れもが東国への道に詳しい者がおらず、道に迷いながら東に進んだ(四文)、と整理できるだろう⁽⁵⁾。このような段落構成は、一人の主人公の提示から周辺情報へと拡散していく記述になっている。

二 下向への思い―旅立ち―

以上のような意味では、主人公の決意を示す二文目に「思ひなす」「あらじ」「住むべき国求め」など、他の三文には存在しない主人公の意思や判断に関わる表現が集中していることが特徴と言えるだろう。加えてこの段落で留意しなければならないのは、都を離れてる下向の行為の目的を「住むべき国求め」ることにあることである。このような目的の背景には、主人公が「身を要なきものに思ひなし」て、本来住むべき地である京を離れようと決意した主人公の姿がある。また都を離れようとする主人公の目的を「住むべき国」と表現するのである。「住む」とは「一定の場所で暮らす、居所と定めてそこにいる、の意」⁽⁶⁾が基本義となるだろう。下向の中で本来の居所とは異なる場所に生活基盤を一定期間置く場合にも「住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる」(『土佐日記』)などのように「住む」が用いられている。

る例が見られる。このような例は一般的に帰郷が前提となっており、本章段の「思ひなし」「あらじ」などの意志表現からすれば、それらの表現性とは異なるのではないだろうか。それだけに固い決意を表明している第二文の補助動詞や助動詞の表現が本章段の主人公造形に大きな意味を有していると考えられる。

本章段における主人公の行動を「旅」の語によって位置づけることも可能だろう。「旅」という行為は「人間が生活の本拠地を離れて、他の土地に移動したり漂泊したりする」⁽⁷⁾と定義できる。また、現代と古代の人びとの思考を対比しながら、伊藤博は「旅」の概念を次のように捉えている。

現実に厭み、日常に窒息したとき、現代人は旅をす
る。旅は現代人にとって此岸からの脱出、此岸の休息であることが多い。「異郷」は憧憬の対象ですらある。しかし、古代人には、一般にこの種の旅は存在しなかった。古代の旅は官司制の圧力に強いられ
て行われることが多く、行楽や逍遙などとはほとんど縁がなかった。⁽⁸⁾

物語として明確な動機が語られないことがないままに主人

公の下向が始まる。その際、この主人公の行動は当時の「旅」と定義できる要素を内包するのを見極めておく必要が肝要ではないか。先掲の『源氏物語』の主人公光源氏の須磨退去は、作り物語ではあるものの政治的な要素が明確に存在した。本章段に描かれる主人公の下向理由については、種々推測がなされている⁽⁹⁾。ものの、明確な判断は困難であると言わざるを得ない。このような物語の冒頭部分からは、古代からある程度普遍的に理解されてきた「旅」とは異なる「旅」への理解が必要になると考えられる⁽¹⁰⁾。

古代において「旅」がいかなる意味を持っていたのかを考える際に留意したいのは、『伊勢物語』全体を見通して検討するの、教材として「東下り」を単独の教材として位置づけるのかという立場である。前者の立場を取れば、次のような表現が先立つ章段に存在することは見逃せないことになる⁽¹¹⁾。

昔、男ありけり。京にありわびて、あづまに行きけるに、伊勢・尾張のあはひの海づらをゆくに、……。

(第七段)

昔、男有りけり。京や住みうかりけん、あづまの方ゆきて、住み求むとて、ともとする人一人二人し

てゆきけり。(第八段)⁽¹²⁾

東国への下向を物語の基盤とする章段である。前者は伊勢・尾張、後者は信濃の浅間山を舞台とする。いずれも下向の要因が「京にありわび」「京や住みうかりけん」と、前者では補助動詞「わび」によって京にすることに困惑した結果、後者では「憂し」が動詞連用形に接続して接尾語的な用法となることから「住む」行為が辛い・厭だという心情の結果として東国への下向に展開している。いずれにしても傷心や京での生きにくさが生じたことによつて東国へ出かけて住もうとする行為は、『伊勢物語』内部では共通した内容として位置づいていると理解できる。

また主人公が下向の旅に立出するにあたって「もとよりに友とする人、一人二人」を同伴していたという。先掲の章段にも「ともとする人一人二人」(第八段)とあり、「友」を同伴者とする設定は同じである。この「とも」には「友・供」の両用が存し、本章段において、いずれの用法であるかは明確ではないけれども、古注では従者(供)と解する令が見られるけれども、近時の注釈では友人(友)と解する傾向にある⁽¹³⁾。このような解釈に抛れば、物語内容は伝承として実態とは乖離した存在で

受け取られていることとなる。それにしても古代の「旅」とは乖離した状況によって物語が語られていることに変化はないと言えるだろう。さらに最終文の「道知れる人もなく」「まどひ行」くのように、明確な目的地がなく逍遙する印象が強く描き出されている。

古代から連綿と続く「旅」とは大きく異なりがあるのが本章段なのではないか。また物語全体として捉えるならば、先行する章段から逍遙する主人公の姿を揺曳しながら紀行としての「旅」を描き出しているのだろう。独立章段として見れば、東国としての異郷の姿を具体的な地名や景物によって演出していると言えるだろう。詳細は各段落の分析の中で述べることにする。

小結

高等学校国語科での定番とも言える『伊勢物語』の「東下り」は、教材分析の観点から読めば、導入部分においても従来見落とされてきた表現が存在している。そうした表現を丁寧に位置づけることで本章段の教材としての新たな活用方法を提示することにつながる。文法知識による品詞分解や口語訳にとどまらず、「我が国の言語文化」の教材として位置づけるためには、解釈が最終到達

点なのではなく、その表現の背後にある特性や思想をあまり出すことを通して連続的あるいは非連続的な言語の変遷と思考の変化とを学ぶことを可能にするだろう。

注

(1) 古典集成では「思ひなす」について「思ひなす」の「なす」は意識してする意。必ずしもそうでないものを、敢えてそうする意にも使う」と注する。

(2) 西「東下り」の段落構成―教材化研究の一齣―(「信大國語教育」二十九号、二〇一九)

(3) 西「伊勢物語」教材研究―第9段「東下り」の和歌解釈を中心にして―(「人文科教育研究」三十三号、二〇〇六)

(4) 澤田浩文の調査では、高等学校国語教科書を刊行する九社で「国語総合」は二五冊。うち「東下り」は二二冊と八割を超える教科書に採録されている。なお、選択科目の「古典A」「古典B」で採録する教科書はない。

(5) これは「主人公の提示↓主人公の決意↓同伴者の存在↓一団の行動」のように簡略化して言いかえることも可能である。

(6) 「すむ」執筆・山口佳紀(秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇)

(7) 「たび」執筆・島内景二(秋山虔編『王朝語辞典』東京

大学出版会、二〇〇〇)

(8) 伊藤博「異郷における抒情」『萬葉のいのち』 塙書房、一九八三)

(9) 片桐洋一は主人公が下向した理由を「恋の挫折」が有力としながら、「政治的挫折」にも言及する(『伊勢物語全読解』和泉書院、二〇一四) 参照。

(10) 片桐洋一は「弟の業平も同じく「事にあたりて」という理由で東国へ赴いたことがなかったとは言いい切れない。官にある時は「假寧令」によって休暇期間が規定されているので、東国流浪はありえないが、無官の時であれば不可能とは言えないのではないかと。当時の自由旅行の実態がわからない今、業平の東下りが実際有り得たか有り得なかったか、断定はもう少し慎重にしたいと思うのである。」(『伊勢物語全読解』和泉書院、二〇一四)と旅の実態や史実との比較を試みているけれども、有益な考察とは言い難い。

(11) 以下、第九段以外の章段の引用は、片桐洋一『伊勢物語全読解』(和泉書院、二〇一四)に拠る。

(12) なお、第八段は写本によって第九段と一続きの章段となっている場合があるけれども、ここでは論題とは関わらないので問題としない。

(13) 例えば「友人。「供」すなわち従者とする説もあるが、次段でも対応な口をきいているので友と見る」(秋山虔『新日本古典文学大系』)、「親しい者が集まって旅に出た形をとっている」(片桐洋一『伊勢物語全読解』)などがあげられる。

追記二件

① 表現に着目した近時の教材研究の成果として、次の文献がある。

中條敦仁「強意」の語句に注目した心情変化の読み取り―『伊勢物語』「東下り」の段について―(『国語科教材研究の起点―素材と向き合うことの意味と視点―』ナカニシヤ出版、二〇二〇)

② 伊藤益『旅の思想―日本思想における「存在」の問題―』(北樹出版、二〇〇一)では、「旅」を通した思想的な変遷を文学作品から検討をおこなっていて参考となる。

(にし) かずお 信州大学
(さわだ) ひろふみ 長野県野沢北高等学校
(とづか) たくや 信州大学教育学部附属長野中学校